

提 言

お医者さんとお人形さん, そしておとなとこども

加我牧子 (国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所)

アメリカの市民生活の哀歓を巧みに描いたノーマン・ロックウェル (1894~1978) の作品に、ドクター&ドールという絵があります。1929年、大恐慌の始まりの年に作られた彼の代表作の1つです。少女が神妙に掲げるお人形さんの胸に、丸顔で太めのお医者さんがとほけた表情をしながら、でも真剣に聴診器をあてています。この子は、おかあさんが彼女にいつもしてくれることを真似て、大事なお人形さんの診察を先生にお願いしたのかもしれない。

子どもたちは大人の言葉を真似し、大人の行動を真似て育ち、やがて大人になっていきます。このたびの東日本大震災ではたくさん子どもたちが自らの命を落とし、また、家族や友だちを失いました。思い出のおもちゃ、お気に入りのお人形を失った子どもも多いことでしょう。しかも放射線被爆の問題が収束するのには、数十年のスパンを覚悟せざるを得ない事態です。

震災後に内閣府が発行した「ほっと安心手帳」は、A4サイズの表裏をあわせてわずか2ページの小冊子 (<http://www8.cao.go.jp/souki/koho/anshintetyo.html>) です。しかし、「被災した子どもに接する周囲の方へ」という項目には紙面全体の四分の一を割き、子どもに現れやすいストレス反応として、甘えたり、反抗的になったり、災害体験を遊びとして繰り返すなどの特徴を示し、一緒にいる時間を増やすこと、話を否定せずに聴くこと、ただし無理に聴き出さないこと、適切なスキンシップの機会をふやすことなどの基本的な対応が、細川紹々さんのかわいいイラストとともに記載されています。この小冊子は被災地を中心に、当事者と支援者に20万部配布されました。大惨事の際に起こりやすい子どもの身体的、心理的特徴と子どもへの接し方を専門家以外の方に伝える役目を充分果たしていると感じます。

信号のある道路を横断するとき、赤信号でも左右を見渡して渡っていくヒトが多くなりました。かく言う私も車にひかれて怪我をしたり、死んだりするのも自己責任、と言い訳して渡ることがあります。ただし、あたりを見まわして子どもがいるときは、車の影が全く見えなくても、どんなに急いでいても、渡らないようにしています。自己満足でもこれが私の姿勢です。なぜなら子どもは大人の行動を見て、言葉を真似して育つから。



Doctor and Doll (1929) by Norman Rockwell (reproduced by kind permission of the Norman Rockwell Family Agency ; © the Norman Rockwell Entities)

お医者さんとお人形

被災した子ども達が悲嘆や不安や空元気を超えて、本来のたくましい力を感じ、安心して遊び、安心して学べる場を確保したいとの思いを強くします。そのため直接ご尽力くださっている方々に敬意を表しつつ、それぞれが自らの持ち場でできることを行い、末長く支援の心を持ち続けたいと思います。被災地であるか否かに関わらず、この大惨事を忘れないでいる大人の、あるいは間接的でも密かに力を注ぎ続けている大人の姿勢を、子どもたちはじっと視ていると思うからです。とりわけ、子どもの味方である私たち小児科医は、彼らの視線に恥じない態度を取りたいものです。

私が子どもの頃に夢見ていたのは、ノーマン・ロックウェルが描いたような、お人形さんを喜んで診察するまじめで優しいまなざしを持つお医者さんだったような気がします。この厳しい環境の中、私たちはこれからも、子どもたちと子どもたちの大切なひとに真正面に向き合って、声をかけ続けていきたいと思っています。